

第 15 回関西 I T 研*
第 113 回日本メディア英語学会西日本地区
合同研究例会のお知らせ

(*通訳翻訳理論および教授法研究会)

日 時 : 2011 年 12 月 11 日 (日) 午後 2 時～ 5 時半

会 場 : 関西大学 (千里山キャンパス) 岩崎記念館 4 階 多目的ホール

対 象 : 関西 I T 研・日本メディア英語学会会員、および翻訳・翻訳教育に関心のある一般の方々

定 員 : 50 名 (申し込み先着順)

第 1 部

柳瀬 陽介さん (広島大学) 講演 (2:00-3:00)

演題 : 「ポスト近代日本の英語教育——両方向の「翻訳」と英語の「知識言語」化について」

第 2 部

翻訳家・山岡 洋一さん 追悼シンポジウム (3:30-5:30)

テーマ : 「翻訳と言語 (英語) 教育」

[シンポジスト (順不同)]

岩坂 彰さん (翻訳家※)

河原 清志さん (日本メディア英語学会理事)

柳瀬 陽介さん (広島大学)

※ウェブサイト「e 翻訳スクエア」にてコラム「岩坂彰の部屋」連載中

(<http://e-honyakusquare.sunflare.com/OceanSite/rooms/article.php?file=1315191966821>)

司会 : 染谷 泰正 (関西大学)

[シンポジウム要旨と概要] 本シンポジウムは、去る 8 月 20 に急逝された翻訳家、山岡洋一さんを追悼し、その生前の業績、とりわけ翻訳教育に関する卓越した言説を振り返りながら、その遺志をどのように受け継いでいくべきかを議論することを目的に開催するものです。山岡さんは、生前、翻訳教育についても活発に発言しておられましたが、遺稿となった「翻訳教育覚書」には、翻訳教育に関する山岡さんのお考えが詳細に述べられています。本シンポジウムでは、まずこの未刊行草稿の内容を簡単にご紹介し、これを受けて 3 名のシンポジストにそれぞれの「翻訳」および「翻訳教育」に関する意見を、問題提起という形で述べていただきます。その後、後半の 1 時間ほどをフロアからの質疑および議論の時間に当てたいと考えています。

問い合わせ・参加申し込み : 染谷 泰正 (someya@someya-net.com) までメールをお願いします。

[発言要旨]

岩坂 彰さん（翻訳家）

『翻訳教育覚書』をめぐって」

山岡氏の「翻訳教育覚書」は、一般教養としての翻訳教育に関する一般論と、翻訳者育成のための教育法に関する具体論からなる。現場で働く翻訳者であり、翻訳者養成の経験（おもに失敗経験）を持つ者として、山岡氏の育成論について支持できる点と疑問を覚える点を体験に即して挙げたうえで、一般教養としての翻訳教育という一般論に考察を進めたい。具体的に育成論で支持したいのは「不安な感覚を大切にすること」、「添削をしないこと」、「自己添削」等であり、疑問として感じるのは「翻訳論を講じることに効果があるのか」、「構文解析は最大の武器か」等である。感覚的な部分をいかに効果的に鍛えるかという方法論については、認知科学的なアプローチが必要だと考える。

一般教養としての翻訳教育という発想は重要である。山岡氏が掲げる「英語力を高めること」や「翻訳の質を評価する力を養うこと」だけでなく、外国語教育の本来の柱の1つである文化理解、さらには自己認識を深める人間教育を進めるうえで、翻訳はきわめて有効な手段となるはずである。

柳瀬 陽介さん（広島大学）

「一般教養としての翻訳教育」

「翻訳教育覚書」は、むしろ一般教養としての翻訳教育について示唆的であるのではないか。翻訳教育は学校教育の中に組み込まれるべきだ。だが私は三つの点で山岡氏と意見を異にする。第一に一般教養としての翻訳教育の（第一の）目的を「英語力」の強化であると、狭く限定するべきではない。翻訳教育が育むのは日本語と（例えば）英語が不可分に化合した複合的言語文化能力（plurilingual and pluricultural competence, Council of Europe）である。第二に、構文解析を翻訳教育の主眼とするべきではない。構文解析の訓練は、口頭での応答だけで済む「英文解釈」の方でむしろ効率的にできる。推敲による書き言葉の洗練を含む翻訳は、構文解析を前提とするが、目的とはしない。第三に、翻訳教育は日本語から英語への翻訳の訓練も行う必要がある。職業的翻訳者としては生計を立て難い、外国語への翻訳も一般市民・職業人は時に行うこともあるし、何より教育的価値が高いからである。だがそのような翻訳教育を行いうる人材は少ない。これが最大の現実的問題である。

河原 清志さん（日本メディア英語学会理事）

「翻訳コミュニケーションの射程と可能性」

通常、翻訳とはある言語で書かれたテキストを別の言語のテキストに変換する言語行為（言語間翻訳）を指すが、「翻訳」という言葉は「メタファー（喩）」として使用され、実に多義的な概念でもある。例えば、社会文化現象を言語で説明／解釈する「文化の翻訳」、異領域間の思想や技術の転移である異領域間翻訳などである。故・山岡洋一氏は「翻訳とは学びである」と唱えた。これは我々の社会文化的営みの根幹に位置する解釈／媒介／転移行為を「翻訳」として捉えるものと再解釈できる。そこで本発表では、翻訳を、①外国語そのものの学びである（広義の）語用実践の営為と、②思想・文化の学びであるメタ語用実践の営為として捉え、「英語メディア」の複層的解釈行為としての翻訳という概念を提示する。そのうえで、国際文化学の観点からグローバル社会における翻訳コミュニケーションの「学び」や社会的意義を論じる。